

陶淵明詩における「園田」の位相

坂口三樹

はじめに

晋・宋の交に生きて、現在に百三十首あまりの作品を残す陶淵明（三六五―四二七）は、しばしば六朝文学史の中で、特異な存在とされてきた。しかし、なぜ陶淵明のみが、当時の文学状況の中であって、そのような存在であり得たのか。

右の問題に答えるためには、陶淵明の文学を、当時の文学状況、あるいはもっと広く文化状況といったものの中で、とらえ直す必要がある。そうすることによって、陶淵明がどのように自己の文学を成立させていったのか、また、それを可能にした要因はどこにあったのかを、ある程度闡明することが出来る¹と考えるからである。

そこで今回は、こうした作業の一環として、陶淵明の「園田」について、考察を加えてみたい。陶淵明が厝を構

えた「園田」については、世俗的な都市から隔絶した空間としてのみ認識されてきたが、従来のこうした認識には、もう一方の面が見落とされているように思われる。当時の文化状況とのかかわりで「園田」を考えることにより、いまままで閑却視されがちであったその面にも、光をあててみようというのが、この稿の目的である。

一、高まる「山水」への関心

ところで、当時の文人たちの文化活動の中心は、いったどこにあったのであろうか。京師を中心とした都市にあったことは、いうまでもあるまい。そして、それと同じくらい、あるいはそれをうわまるほどに好まれたのが、都市とは色々な意味において対蹠的な場所と思われる山紫水明の景勝地、即ち「山水」なのであった。晋の顧愷之（三四五―四〇六）や宋の宗炳（三七五―四〇六）等の伝記に見

える記述は、当時の貴族たちの間に、山水愛好の気風がいかに浸透していたかを物語っていて興味深い。あるいは、これらの人々の山水画がもてはやされたこと自体が、何よりもそのことを示しているといえようか。また、当時、夥しい数の所謂「山水遊記」⁽³⁾が書かれたことも、その一証左となるであろう。

ただし、ここにいる「山水」とは、単なる景色の美しい地という謂いではない。それは、まず何よりも、文化的に著名な「名山」でなければならなかった。具体的にいうならば、天台山や会稽周辺の地であり、廬山や衡山がそれであった。なかでも、会稽と廬山は、当時において、最も人々の関心を集めていた「山水」であった。

会稽への人々の関心が、ひととき高かったことは、先に触れた『晋書』「顧愷之伝」によっても伺えるところである。他にも、晋の謝安（三二〇—三八五）の「東山高臥」⁽⁴⁾の故事や、晋の王羲之（三〇七—三六五）の会稽山陰の蘭亭での宴集などは、その好例といえるであろう。特に、當時にあって、会稽が文化活動の一大中心地の観をなしていたことは、次の一文が、端的にそれを示している。

會稽有佳山水。名士多居之。謝安未仕時亦居焉。孫綽・李充・許詢・支遁等皆以文義冠世。並築室東土、與

羲之同好。（『晉書』卷八十、王羲之傳）

会稽に佳山水有り。名士多く之に居り。謝安未だ仕へざる時亦た焉に居り。孫綽・李充・許詢・支遁等皆文義を以て世に冠たり。並びに室を東土に築き、羲之と好みを同じくす。

また、これら門閥貴族たちとは別に、会稽に集まった人物として、隠者と呼ばれる一群の人々の存在があげられる。不完全な調査ながら、『晋書』および『宋書』の「隱逸伝」中の人物について見ると、いくつかの興味ある事実が浮かび上がってくる。一つは、「名山（の下）に居り」という記述にしばしばぶつかること。もう一つは、それらの多くが「山水を好む」という語句をともなっており、ということである。次に、若干の例を掲げよう。

會稽剡縣多名山。故世居剡下。（『宋書』卷九十三、隱逸傳・戴顓）

会稽の剡県には名山多し。故に世々剡下に居り。

家貧、而性好山水。……始寧沃川有佳山水。弘之又依巖築室。（『宋書』卷九十三、隱逸傳・王弘之）

家貧しくして、性山水を好む。……始寧の沃川に佳山水有り。弘之又巖に依りて室を築く。

居會稽剡縣、性好山水、每有所游、必窮其幽峻、或旬

日忘歸。(『宋書』卷九十三、隱逸傳・孔淳之)

會稽の剡県に居り、性山水を好み、遊ぶ所有る毎に、必ず其の幽峻を窮め、或いは旬日帰るを忘る。

隱者が、都市を離脱して山林へ遁逃したことは、伯夷・叔齊以来、古い歴史を持つ。それは、都市の権力や奢侈を否定する、いわば反都市の情念に支えられた行動なのであった。西晋までの隱者も、恐らくそのような存在であったと考えられる。ところが、東晋から宋代にかけての隱者はどうであったか。彼らは、同じく都市を離脱して山林に隠棲したといっても、その動機は「山水を好む」ことにあつたのであつて、その点では先に見た謝安や王羲之たち門閥貴族と、基本的には変わりはない。つまりは、彼らも山水愛好の氣風に取り込まれた存在なのであつた。

晋・宋の山水愛好の風尚について考える場合、右に述べた門閥貴族や隱者とは、また少々性格を異にした集團の存在が目につく。廬山に依る、慧遠(三三四—四一六?)を中心とした白蓮社の人々がそれである。戒律を重んじ、都市の腐敗した仏教を嫌つて廬山に籠もつたこの結社は、世俗の権力と妥協しない存在であつた。慧遠が、時の権力者桓玄(三六九—四〇四)に対して「沙門不敬王者論」を著した経緯は、その性格を最も雄弁に物語つていよう。

初庾氷輔政、以沙門應敬王者。何充奏不應禮。及元在姑熟、復申氷議。師答書曰、袈裟非朝宗之服、鉢盂非廊廟之器。塵外之容、不應致敬王者。乃著沙門不敬王者論。(『蓮社高賢傳』慧遠法師)

初め庾氷政を輔せしとき、以へらく沙門は応に王者を敬すべしと。何充に礼すべからずと奏す。元(桓玄)の姑熟に在るに及びて、復た氷の議を申ぬ。師の答ふる書に曰はく、袈裟は朝宗の服に非ず、鉢盂は廊廟の器に非ず。塵外の容にして、応に敬を王者に致すべからずと。乃ち沙門不敬王者論五篇を著す。

このように、反権力的・反都市的な性格を持つ白蓮社に關係する人物の記述も、『宋書』「隱逸伝」中には散見される。例えば、次のような人々がそれである。

周續之、字道祖、……入廬山事沙門釋慧遠。時彭城劉遺民遁迹廬山。(『宋書』卷九十三、隱逸傳・周續之) 周統之、字は道祖、…廬山に入りて沙門釋慧遠に事ふ。時に彭城の劉遺民も迹を廬山に通す。

少入廬山、事沙門釋慧遠。(『宋書』卷九十三、隱逸傳・雷次宗)

少くして廬山に入り、沙門釋慧遠に事ふ。

この他にも、廬山に集つた人は数多くいた。『蓮社高賢

伝』には、結社の要人十八人の名とともに、衆百二十三人を擁するに至った旨を記している。⁽⁵⁾ こうした記録に徴すれば、当時、廬山は新しい宗教の、いわば「メッカ」であったと考えられる。そして、その新しい宗教——文化を求め多くの知識人が集まる場所でもあったのである。

以上、会稽と廬山をモデルに、東晋から宋代にかけての山水愛好の風尚について概観した。会稽と廬山では、多少その性格は異なるが、⁽⁷⁾ ともかく貴族や知識人の眼が、常に山水に向かつて注がれていたことは明らかにし得たであろう。山水を愛し、景勝の地に別墅を営んで風流事にあけられる門閥貴族。同様の理由で、次々と都市を離脱してゆく隠者たち。こうした山水愛好の風尚の中心地が、他ならぬ会稽と廬山なのであった。東晋から宋代にかけては、こうした山水愛好の風尚の渦巻く時代であったのだ。そして、それはとりもなおさず、陶淵明の生きた時代でもあった。

二、世俗の否定——「園田」の境位(1)

陶淵明が身を置いた「園田」は、確かに都市とは隔たった空間であった。そのことを示す作として、次の詩が挙げられる。

辛丑歳七月赴假還江陵夜行塗口

辛丑の歳七月、赴仮して江陵に還らんとし、
夜塗口を行く

間居三十載	間居すること三十載
遂與塵事冥	遂に塵事と冥し
詩書敦宿好	詩書 宿好を敦くし
林園無世情	林園 世情無し
如何舍此去	如何ぞ 此れを捨てて去り
遙遙至西荆	遙遙として西荆に至るや
叩棹新秋月	棹を叩く 新秋月の月
臨流別友生	流れに臨みて友生に別る
涼風起將夕	涼風 將に夕べならんとするに起こり
夜景湛虛明	夜景 虛明を湛ふ
昭昭天宇闊	昭昭として天宇闊く
鼎鼎川上平	鼎鼎として川上平らかなり
懷役不遑寐	役を懷へば寐ぬるに遑あらず
中宵尙孤征	中宵 尚ほ孤り征く
商歌非吾事	商歌は吾が事に非ず
依依在耦耕	依依たるは耦耕に在り
投冠旋舊墟	冠を投じて旧墟に旋り
不爲好爵榮	好爵の為に榮がれざらん
養眞衡茅下	眞を衡茅の下に養ひ

庶以善自名 庶はくは善を以て自ら名あらしめん

隆安五年（四〇一）、休暇を終えて江陵に帰任する途次に詠まれた作である。冒頭四句は、世俗から隔絶していた郷里での生活を回想したものであるが、第四句にいう「園田」とは、「園田」とほぼ同義と考えてよいであろう。そこは、「世情の無」い空間として位置付けられている。さらに、第十五句以下の後半部には、「冠」や「好爵」に象徴される世俗を否定して、「旧墟」に「旋」るべきことを述べているが、その「旧墟」、即ち「園田」こそが、「真」と「善」に貫かれた生活を実現できる空間であった。元興三年（四〇四）の作とされる次の詩でも、「園田」はそのような空間として詠じられている。

始作鎮軍參軍經曲阿作

始めて鎮軍參軍と作り、曲阿を経しときに作る

弱齡寄事外

弱齡より事外に寄せ

委懷在琴書

懷ひを委ぬるは琴書に在り

被褐欣自得

褐を被て欣びて自得し

屢空常晏如

屢々空しきも常に晏如たり

時來苟冥會

時來たりて苟か冥會し

宛轡憩通衢

轡を宛げて通衢に憩ふ

投策命農裝

策を投じて農裝を命じ

暫與園田疎 暫く園田と疎なり

眇眇孤舟逝 眇眇として孤舟逝き

緜緜歸思紆 緜緜として歸思紆はる

我行豈不遙 我行 豈に遙かならざらんや

登降千里餘 登降すること千里余

目倦川塗異 目は川塗の異なるに倦み

心念山澤居 心は山沢の居を念ふ

望雲慙高鳥 雲を望みては高鳥に慙ぢ

臨水愧遊魚 水に臨みては遊魚に愧づ

眞想初在襟 眞想 初めより襟に在り

誰謂形迹拘 誰か謂はん 形迹に拘せらるると

聊且憑化選 聊か且らく化に憑りて選り

終反班生廬 終には班生の廬に反らん

ここにうたわれているのは、「園田」と「疎」となってしまう悲しみであり、大自然に抱かれた「山沢居」を恋う真情である。この「園田」「山沢居」は、「形迹に拘せら」れている現在の役人生活とは、対立する価値観を持った空間でなければならぬ。それは、第十七句に「眞想」とあるように、「真」の一字が用いられていることによっても裏付けられよう。何者にもとらわれない本然の自由な精神「真」を実現する場所が、この詩にいう「園田」であり、

「山沢居」なのであった。

このような、世俗と隔絶した空間としての「園田」の例は、他の詩にも求められる。

静念園林好 静かに念ふ 園林の好きを

人間良可辭 人間 良に辞すべし

(庚子歲五月中從都還阻風於規林二首・其二)

園田日夢想 園田 日々に夢想し

安得久離析 安んぞ久しく離析するを得んや

(乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪)

以上に掲げた諸作は、いずれも官界に身を置いていた時のものである。権力と富と名声とを追い求めることに血道をあげる政治の世界。それは、都市を中心に繰り広げられた。そうした世俗の世界をきっぱりと否定して、淵明は「園田」における「真」の境地を希求したのであった。

こうした陶淵明の「園田」の境地を最もよく示す作として、最後に次の著名な一篇を掲げておこう。

歸園田居五首 園田の居に帰る五首

其一 其一

少無適俗韻 少くして俗に適する韻無く

性本愛邱山 性本邱山を愛す

誤落塵網中 誤りて塵網の中に落ち

一去三十年

一去三十年

羈鳥戀舊林

羈鳥 旧林を恋ひ

池魚思故淵

池魚 故淵を思ふ

開荒南野際

荒を開く 南野の際

守拙歸園田

拙を守りて園田に帰る

方宅十餘畝

方宅 十余畝

草屋八九間

草屋 八九間

榆柳蔭後簷

榆柳 後簷を蔭ひ

桃李羅堂前

桃李 堂前に羅なる

曖曖遠人村

曖曖たり 遠人の村

依依墟里煙

依依たり 墟里の煙

狗吠深巷中

狗は吠ゆ 深巷の中

雞鳴桑樹巔

鶏は鳴く 桑樹の巔

戶庭無塵雜

戶庭 塵雜無く

虛室有餘閑

虚室 余閑有り

久在樊籠裏

久しく樊籠の裏に在りしも

復得返自然

復た自然に返るを得たり

第三句の「塵網」や第十九句の「樊籠」とは、直接には役人としての生活を指すのであろうが、それは都市の世俗性を象徴するものである。「俗に適する韻」の無い陶淵明が「拙を守」って帰った「園田」は、こうした世俗的な都

市とは隔絶した空間であった。そして、そこに帰ることに
よって、本来的な、自由な自己を回復し得たのであった。

三、山水との距離——「園田」の境位(2)

しかしながら、こうした認識には、「園田」のもう一つ
の側面が見落とされてはいはしないか。それは、彼の「園田」
が、当時の貴族や知識人たちの好んだ「山水」とも距離を
保っていたという面である。先に掲げた「歸園田居五首・
其一」の第二句に、「性本愛邱山」とあったことに注意し
よう。この句は、『宋書』「隱逸伝」などにしばしば見られ
た「性好山水」と酷似した表現であり、山水愛好の風尚を
示す常套的表現ととれなくもない。それ故、そこから淵明
をも、会稽や廬山に集った貴族や隱者たちの一変種として
捉える見方も生まれてくるのであるが、しかし、それでは
当を失することになりはしまいか。なぜなら、淵明のいう
「邱山」とは、具体的には詩の第七句以下に展開される「園
田」の風景を指したものに他ならず、会稽等の景勝地をい
う「山水」とは、根本的にその性格を異にしているのでは
ある。この「山水」と「邱山」の違いは、小さなことの方
だが、まことに大きな意味を持っているといわねばならな
い。なぜなら、陶淵明はあくまでも「園田」を自己の立脚

点とし、当時の貴族や知識人たちが好んだ「山水」からは
距離を保とうとしていたことを、それは示唆していると考
えられるからである。

次に、そのことを示す詩を取り上げよう。「和劉柴桑」
の詩が、それである。

和劉柴桑 劉柴桑に和す

山澤久見招	山沢より久しく招かるるも
胡事乃躊躇	胡事ぞ 乃ち躊躇せる
直爲親舊故	直だ親旧の爲の故に
未忍言索居	未だ索居を言ふに忍びず
良辰入奇懷	良辰 奇懷に入り
翠杖還西廬	杖を翠へて西廬に還る
荒塗無歸人	荒塗 婦人無く
時時見廢墟	時時 廢墟を見る
茅茨已就治	茅茨は已に治に就き
新疇復應畬	新疇も復た応に畬なるべし
谷風轉淒薄	谷風 転た淒薄
春醪解飢飢	春醪 飢飢を解く
弱女雖非男	弱女は男に非ずと雖も
慰情良勝無	情を慰むるには良に無きに勝れり
栖栖世中事	栖栖たり 世中の事

歲月共相疎 歲月 共に相疎んず

耕織稱其用 耕織 其の用に稱はば

過此奚所須 此れに過ぐるは奚の須むる所ぞ

去去百年外 去り去りて百年の外

身名同翳如 身名 同じく翳如たらん

詩題にいう「劉柴桑」とは、柴桑県の県令であった劉程之（三五四？—四一〇？）。劉遺民ともいい、周統之・陶淵明とともに「潯陽の三隱」と呼ばれた人物で、白蓮社の重要な社員でもあったらしい。詩は、その劉遺民と唱和したものであるが、第一句にいう「山沢より久しく招かる」とは、いったいどういう意味であらうか。斯波六郎氏は、「山澤から招かれた。即ち劉柴桑令から山澤へ来いと招かれたのであるか。」（『陶淵明詩譯注』二二頁）と注するが、考えをもう一步推し進めることは出来ないか。そもそも、劉遺民のいる「山沢」とはどこなのか。それは、廬山を指しているのではあるまいか。劉遺民が、白蓮社の重要な社員であり、「迹を廬山に遁」した人物であったことは、すでに先に見た。そして、陶淵明が和した劉遺民の詩とは、——当の作品が伝わらない今日、あくまでも推測の域を出ないけれども、——陶淵明を白蓮社に入社させるべく、慇懃の意図あつて贈られたものではなかったか。淵

明の詩の第四句に「未だ索居を言ふに忍びず」とあることも、そのことを示唆していよう。白蓮社に入れば、当然のことながら家族と離れて、一人廬山に籠もらねばならないからである。陶淵明のこの詩は、こうした劉遺民からの誘いを、第三句以下にその「園田」での生活を述べることによつて、いわば謝絶した格好になっていよう。第五句の「西廬」については諸説のあるところであるが、淵明の住む廬を指すことには変わりはない。そこには「新疇」があり、「飢飭を解」く「春醪」や「情を慰」めるに足る「弱女」が待っているのだ。「親旧」のいる、こうした「園田」での生活を捨ててまで「索居」することは出来ない。なぜなら、廬山に入ったところで、「百年」の後には「身名」ともに「翳如」たることに変わりはないからだ。陶淵明は、こういって「山沢」、即ち廬山からの招きを、謝絶したのではなかったか。

ところで、ここで注意されるべきは、この詩における「山沢」が、自分が身を置くべき空間ではないとして、否定的に捉えられている点である。淵明の詩における「山沢」の使用例は、全部で四例を数えるが、先に掲げた「始作鎮軍參軍經曲阿作」の詩では、そこは世俗と決別して帰るべき空間として、肯定的に提示されていた。次の例も、

それと同様の位置付けのもとに、用いられていると考えられよう。

久去山澤遊 久しく山沢の遊びを去りしも

浪莽林野娛 浪莽たり 林野の娛しむ

(歸園田居五首・其四)

そもそも「山沢」とは、知識人にとってどのような空間であったのか。「始作鎮軍參軍經曲阿作」(『文選』卷二十六「行旅上」所収)の李善注に引く仲長統(一七九—二一九)の『昌言』に「古之隱士、或夫負妻戴、以入山澤。」とあり、また、『後漢書』卷五十一「李恂伝」に「後坐事免、步歸鄉里、潛居山澤、結草爲廬。」とあるのなどを勘案すれば、「山沢」は官界から身を遠ざける空間として認識されていたらしい。嵇康(二二三—二六二)の「與山巨源絶交書」(『文選』卷四十三所収)に「遊山澤、觀魚鳥心、甚樂之。一行作吏、此事便廢。」とあることも、その証左とならう。

しかし、世俗にあった時には、官界から身を遠ざける場として意識されていた「山沢」も、「園田」に身を置いた淵明にとっては、もはや自己の帰るべき空間とは意識されなくなっていた。つまり、「山沢」は「園田」とは同じ次元では捉えられなくなっていた。そこは、あくまでも劉遺

民のような隱士の「索居」する空間であって、日常生活の中に、人間のあるべき姿を見ようとする淵明の依拠すべき空間ではなかったのである。

同じく、隱士劉遺民を相手とする贈答詩に、次の一首がある。

酬劉柴桑 劉柴桑に酬ゆ

窮居寡人用 窮居 人用寡く

時忘四運周 時に四運の周るを忘る

欄庭多落葉 欄庭 落葉多く

慨然知已秋 慨然として己に秋なるを知る

新葵鬱北牖 新葵は北牖に鬱たり

嘉稔養南疇 嘉稔をば南疇に養ふ

今我不爲樂 今我樂しみを為さずんば

知有來歲不 來歲有りや不やを知らんや

命室攜童弱 室に命じて童弱を攜へ

良日發遠遊 良日 遠遊に発せん

この詩に述べられているのも、「園田」の「窮居」での生活であり、「童弱を攜」えて「遠遊」する「樂しみ」である。このようなさげない日常の樂しみを、淵明は数多くの詩に詠み込んでいる。

漉我新熟酒 我が新熟の酒を漉し

隻雞招近局 隻鶏もて近局を招く

日入室中闇 日入りて室中闇く

荆薪代明燭 荆薪もて明燭に代ふ

歡來苦夕短 歡び來たりて夕べの短きに苦しみ

已復至天旭 已に復た天旭に至る

(歸園田居五首・其五)

春秬作美酒 秬を春きて美酒を作り

酒熟吾自斟 酒熟して吾自ら斟む

弱子戲我側 弱子 我が側に戯れ

學語未成音 語を學びて未だ音を成さず

此事眞復樂 此の事 眞に復た樂し

聊用忘華簪 聊か用て華簪を忘る

(和郭主簿二首・其一)

こうした樂しみは、廬山での戒律に縛られた世界では、決して得ることの出来ないものであった。そして、それは「園田」という場でのみ、初めて手に入れ得るものだったのである。淵明は、あくまで「園田」という日常に依拠して、人間のあるべき姿を見ようとする。さきに見た、劉柴桑との二首の贈答詩には、そうした淵明の姿勢が、強く打ち出されているといえよう。

しかし、そうした樂しみがある一方で、そこには勞苦と

貧困の日常も存在していた。

田家豈不苦 田家 豈に苦しからざらんや

弗獲辭此難 此の難を辭するを獲ず

四體誠乃疲 四体 誠に乃ち疲る

庶無異患干 庶はくは異患の干す無からんことを

(庚戌歲九月中於西田穫早稻)

炎火屢焚如 炎火 屢々焚如たり

螟蟻恣中田 螟蟻 中田に恣にす

風雨縱橫至 風雨 縱橫に至り

收斂不盈廩 收斂 廩に盈たず

夏日長抱飢 夏日には長に飢ゑを抱き

寒夜無被眠 寒夜には被無くして眠る

造夕思雞鳴 夕べに造れば鶏鳴を思ひ

及晨願鳥遷 晨に及べば鳥の遷らんことを願ふ

(怨詩楚調示龐主簿鄧治中)

こうした敵しい現実に直面しながらも、淵明はそれと「己」に在り、何ぞ天を怨みん(怨詩楚調示龐主簿鄧治中)と、自分自身の問題として受け止める。のっぴきならない現実を前に、彼は一人ですれと対峙しようとする。「園田」は、彼にとって、苛烈な現実と斬り結ぶ場でもあったのである。そして、そこから生じる葛藤の中から、彼は人間の

生の姿を、観念ではなく生身の感触によって、じかに捉えていったのではなからうか。淵明は園田空間で展開される純朴な人々の姿や恍惚たる酔境に、あるいは子供たちの嬉戯する姿の中に、人間の本来的な生の姿を見出だそうとする。「園田」での日常生活における具体的な行為をうたうことは、彼にとって人間のあるべき姿を捉えようとする営みだったのであつたか。

むすび

文学活動、あるいは文化活動の中心が、都市とともに山水にあつたこの時代あつて、陶淵明が「園田」に居を構えた事実、そして、そこを立脚点として文学活動を行つたという事実は、十分に考慮されてよいと思う。やや図式的な把握をすれば、「園田」は、都市と山水の中間に位置して、そのどちらにも属さない場所である。そして、陶淵明がそこに立脚したということは、単なる物理的な位置だけではなく、彼の精神的な位置——境位をも示すものではなかつたか。都市から隔たるとともに、山水からも距離を保っている「園田」。当時の文学活動の主要な場であつた都市と山水のそのどちらにも属さない地点から、陶淵明は文学活動を行つたのだ。そして、そのことは、『文選』所収の彼

の詩の内訳が、謝靈運（三八五—四三三）などのそれと大きく傾向を異にすること、恐らく無関係ではあるまい。例えば、謝靈運の詩のほぼ半数を占める遊覧・行旅の詩の白眉は、あくまでも山水の景を叙する部分にあるのであつて、それは山水愛好の風尚の産物に他ならない。むしろ、それ故にこそ、彼の作品は、当時にあつて圧倒的多数の支持を集め得たのではなかつたか。

そもそも、「園田」とは、本来的に生活の場である。それに対し、「山水」は、貴族や隠者がいくらそこに居を設けようとも、結局は彼らにとって、遊覧の対象でしかなかつた。また、慧遠たちの集団にとっては、浄土を求める修行の場であり、魂の救済の場であつたけれども、やはり生活とはかけはなれた、非日常的な空間であつた。陶淵明が依拠した「園田」は、この点で「山水」とは次元を異にした空間であつたのだ。陶淵明は、その詩の中に、「園田」での生活を執拗なまでにうたい続けた。「園田」の境位から、彼は当時の貴族や知識人が捨てて顧みなかつたここでの生の意味を、問い続けていたのだろう。

注

(1) これについては、すでに大室幹雄氏の『園林都市』（昭和六〇・八、三省堂書店刊）に詳細な研究があり、本稿もそれか

ら多大な恩恵を受けた。

(2) 「遷至荊州、人間以會稽山川之狀。愷之云、千巖競秀、萬壑爭流。草木蒙籠、若雲興霞蔚。」(『晉書』卷九十二、文苑傳・顧愷之)「好山水、愛遠遊、西陟荆巫、南登衡岳、因而結宇衡山。」(『宋書』卷九十三、隱逸傳・宗炳)

(3) 「山水記」または「山水遊記」については、小尾郊一氏の『中国文学に現われた自然と自然観』(昭和三七・一一、岩波書店刊)に詳細な研究がある。それによれば、謝靈運の「居名山志」「遊名山志」をはじめとして、賀循の「石笄山記」、羅含の「湘中山水記」、袁山松の「宜都山川記」、袁宏の「羅浮山記」、慧遠の「廬山略記」等、数多くの作品の存在が知られる。

(4) 『晋書』卷七十九「謝安伝」に、「安雖放情丘壑、然每游賞、必以妓女從。……中丞高崧戲之曰、卿果違朝旨、高臥東山、諸人每相與言、安石不肯出、將如蒼生何、蒼生今亦將如卿何。安甚有愧色。」とある。

(5) 「既而謹律息心之士・絕塵清信之賓、不期而至者、慧永・慧持・道生・曇順・僧叡・曇恆・道曷・曇詵・道敬・佛駄邪舍・佛駄跋陀羅・名儒劉程之・張野・周續之・張詮・宗炳・雷次宗等、結社念佛、世號十八賢。復率衆至百二十三人、同修淨土之行、造西方三聖像、建齋立誓。」(『蓮社高賢傳』慧遠法師)とある。

(6) 白蓮社に集った知識人としては、他に謝靈運がある。また、陶淵明その人も、どうやら関係があったらしい。『蓮社高賢伝』「不入社諸賢伝」には、「時遠法師與諸賢結蓮社、以書招

淵明、淵明曰、若許飲則往。許之、遂造焉、忽攢眉而去。」とある。

(7) しかし、廬山の場合も、慧遠その人は反都市の情念が濃厚だったにせよ、時代に山水愛好の気風が浸透していたからこそ、多くの有名人士を集め得たとも考えられる。謝靈運や宗炳等の白蓮社への接近は、つまりは「山水愛好」の延長線上に過ぎず、また、劉遺民の場合も、「値廬山靈運、足以往而不反。」(『廣弘明集』卷二十七「與隱士劉遺民等書」前序)というのが、廬山入山の契機の一つにあるのであって、この点で、根本的には廬山も会稽の場合と、それほど相違がないともいえる。

(8) (1) 前掲書・第十二章参照。

(9) 陶淵は、何孟春の「西廬、指上京之舊居。」という注を引くが、丁福保はそれを非とし、「此乃指自上京移居之南村而言。」と注する。

(10) 淵明以前の詩人では、陸機(二六一—三〇三)に二例認められるが、そこでは、淵明のように、身を置くべき空間が否かの意味付けは行われていない。また、淵明には、「山沢」の他に、「山川」「山河」などの用例も見られるが、それらはいずれも「山沢」のように、特殊な意味を持った空間としては位置付けられていないようである。

(11) 『文選』における、淵明および同時代の詩人の収載詩の内訳は、次の表の通りである(但し、四者ともに作品のない部立は除いた)。

○『文選』の部立と収載詩数の内訳

部立	詩人			
	陶淵明	謝靈運	顔延之	鮑照
述德	○	二	○	○
公譙	○	一	二	○
祖餞	○	一	○	○
詠史	○	○	六	一
遊覽	○	九	三	一
哀傷	○	一	○	○
贈答 二二三四	○	三	四	○
行旅 上下	二	一○	三	一
郊廟	○	○	二	○
樂府 上下	○	一	○	八
挽歌	一	○	○	○
雜詩 上下	四	四	○	二
雜擬 上下	一	八	○	五
合計	八	四○	二○	一八
	(三六五—四二七)	(三八五—四三三)	(三八四—四六五)	(四二二—四六六)

(12) 『宋書』卷六十七「謝靈運伝」には、「每有一詩至都邑、
貴賤莫不競寫、宿昔之間、士庶皆徧、遠近欽慕、名動京師。」
とある。

(筑波大学大学院)